

烈として、其煙雲とひとしく、天を焦す勢なり、傍に淵あり、水波瀧々とし、時々なみさかだち、風を起し、邊をはらふ氣色、尋常の事にあらず、因て方俗こゝを地獄といふ。

〔和漢三才圖會陸奥十五〕燒山 在南部領自大畑三里半計

此山不時有燒故名之、開基慈覺大師作千體石地藏、中尊長五尺許、其他小佛而人取去、今僅存、近頃有僧圓空者修補千體像、

商賈有竹内興兵衛者用唐銅作彌陀大日藥師三像安之、

嶺上有三塗川及塞河原、層小石爲塔形、又有三百三十六地獄而名修羅者、地面皆石、而凡長二十五丈、幅五六丈、其石面如血色者散染、亦一異也。名劍山者、滿山石悉有劍尖、而如刀鋒、然其餘酒造家、藍染家、麴造家等之地獄皆現其色狀、凡有硫黃山必火煙出、溫泉涌故自可謂地獄者有之、殊當山與肥前溫泉嶺見人莫不驚歎、

〔東遊雜記十九〕おそれ山の事は、燒山と記して、和漢三才圖會にも歌わせし、不時に燒る故にもつて燒山と稱すとあるは、大虛說也、此山は、青森を出るよりは、日々面白く見る山にて、さしての高山といふにもあらず、浦々にて、此山の燒し事を見しものありやと、案内のものは云に及ばず、人に尋ねし事なるに、老人の申傳へにも、恐れ山の燒しといふ事は承り不申、雲霧の常に峯にかかりしも見れば、煙りのごとく見へる事ゆへたまく來し旅人の煙を見て、焼るといひし事なるらん、と皆々云ひし事也、日本僅の國ながらも、其地に至らずして、人の物語を信じて書に顯す故に、大に違ひし事の有と思われ侍る也、

〔東國旅行談五〕南部之燒山

奥州南部領八之戸より程ちかき所に、大畠云村より登る山なり、峰までの道法三里半といふ、此山の絶頂は、時として一陽の火おこり、猛火焰々として燃あがり、煙雲を拂ふ有さまなるが、又時